

生存を選択することとなる。
 てしまう。この瞬間から、下人が生物として
 飢え死にする」と、檜皮色の着物を盗み取っ
 「おまえがしているようにしなければ、俺が
 現されているが、生きることへの選択である。
 うにある方向へ向う。文中では「勇気」と表
 この話を聞いた下人の良心は堰を切ったよ
 てくれるだろう」。老婆の理屈だった。
 わたしのしていることも、この女は大目にみ
 生きるための術なのでしかたがない。だから
 「この女は蛇を干し魚と偽って売った。だが
 をとどまらせている良心からだった。
 いる老婆を下人は問いつめる。盗人になるの
 ている。死者に対してこのような行為をして
 老婆は放置された死体から、髪の毛を抜い
 ついて変色してしまっただのか。
 の色になっってしまったのか。老婆の垢が染み
 はなかったはずだ。死体の血が染みついてそ
 と出会う。檜皮色の着物は、元からその色で
 そこで下人は檜皮色の着物を着ている老婆

生物は「生きるためには無様なまねをしてでも生き延びる努力をする」と聞いたことがある。地球の環境が変わると、形態をも変えてしまおう。隕石の衝突で地上が灼熱地獄となれば、姿を変えて地下へ、深海へと避難する。何千万年もの間ときが来るのを待ち続ける。生きるというのはわたしたちが考えている以上に、懸命なものなのかもしれない。後天的な「盗みはいけない」という常識がどれだけの重みを持つのか、生きるか死ぬかと選択を迫られたならば、わたしには答えられない。「下人の行方は、誰も知らない」で、『羅生門』は終わる。この一文で生きるとはどういうことなのかとわたしは考えた。何とも言えない憂鬱な余韻が残った。

芥川龍之介は三十五歳で自殺する。生きる本能をも凌駕してしまう芥川龍之介の創作活動の凄まじさに鳥肌が立つような気がする。命の代償のひとつが『羅生門』最後の一文であるように思えてならない。